
とあるチートを持って！

百合姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるチートを持つて！

【Nコード】

N1936Z

【作者名】

百合姫

【あらすじ】

注・タイトル変更しました。

この物語は二次に良く見られる噛ませ犬として出される性格の悪いオリ主が主人公であり、そんな主人公が改心したけれど前の評判が評判なだけに肩身の狭い思いをしたり、勘違いされたり物語です。（予定では）

いまいちイメージがわかないって人はとりあえず読んで見ると良いと思うよ！

作者が現実逃避としてバカな作品を書きたいと思ったがゆえの投稿

です。ゆえにギャグテイスト。シリアスは・・・ないと思われ。
そして更新速度に過度な期待はしないでください。
なおかつジュエルシード事件のみで完結するかもしれません。

ぶろろーぐ（前書き）

始めに言っておきます。

感想などではオブラートに包んでね。

作者は非常に打たれ弱いのです。

ぶろろーぐは三ページ分くらい。

噛ませ犬的勘違い系主人公のアホさ具合をお楽しみください。

まあそんなに量があるわけでもないですけども。

プロローグが終わると勘違いから改心します。

それとおそらく下ネタはあまり無いと思います。今回がピークってくらいかも。

今のところヒロインはいつそのことフェイトの母のプレシアにしてしまおうかとも思っていたりして。

レベル高すぎるかな？

そしてご都合主義は出来るだけ省きたいとは思ってます。期待はしないで欲しいですが。

ぶろろーぐ

おっばい。

ある人は言った。

それは神秘のベールに包まれた神々の宝玉だと。

ある人は言った。

そこに全てを置いてきた。探し出せ、その秘宝を、と。

ある人は言った。

女体最高！！と。

ある人は言った。

胸とは。胸ではなくおっばいである、と。

ある人は言った。

おっばいを求めずして何を求める？

富か？名誉か？

否！！

男として生まれたからには至高のおっばいを求めずして何とする。
と。

ある人は言った。

おっばいに何が詰まってるかだって？

HAHAHAHA！何を今更なことを。

・・・ふっ。

浪漫が詰まってるのさ。

ある人は言った。

いや、胸に詰まってるのは脂肪だろ？と。

ある人は言った。

そついう夢の無い奴は腸を^{はらわた}ぶちまけて死ね、と。

ある人は言った。

人体の神秘。言い換えるならそれだね。と。

ある人は言った。

あの曲線美。柔らかさ。重量感。すべてにおいてマーベラス、と。

ある人は言った。

芸術はおっぱいだ！と。

ある人は言った。

小さなおっぱいも大きなおっぱいも等しく皆おっぱい。全てのおっぱいを私は愛そう、と。

『本当にそれで良いの？』

「ええ、もちろん。」

『男神じゃない女神の私には分からないけど・・・そんなので良いの？』

「はい。」

『・・・ま、まあ頑張つてね？』

「ありがとうございます。俺、良い嫁さんを探します。」

『別にそんな決意を私に聞かされてもドウ答えれば良いか・・・』
「暗に貴方に嫁になつてくれないかな？と。」

『H A H A H A、無理。貴方みたいな変態、好みじゃないから。』

「し、失敬なっ！！」

揉むにしても決して無理やりには・・・」

『・・・はあ。とつと行つて頂戴。気持ち悪いもの。貴方。』

「ふふふふ。これで俺のオリ主ハーレムが・・・ぐふふふ。」

『本当に気持ち悪い。・・・じゃあね。』

「はい、本当にありがとうございました。」

こうして1人の男。

オリ主でイケメンな彼が異世界でハーレムを作るべく頑張つてみる物語が始まる。

はつきり言おう。

彼のその夢はかなわないだろう。
なぜならば。

『・・・勘違い系オリ主つてところかしら。

あんなの好きになる子が居たら・・・不憫すぎるわ。』

この物語は勘違い系の彼が主人公の物語である。

最近の二次創作には転生オリ主の他にままオリジナル主人公が出てくるが、その中でもヒロインに纏わり付く嫌われ者の勘違い系の噛ませ犬オリ主。

この物語は、その噛ませ犬側の彼から見た物語である。

果たして彼はまともな主人公となりえることが出来るのか？
気味悪がられずにヒロインに近づくことが出来るのか？

さてはて皆様。

「魔法少女リリカルなのは」の世界にようこそ。

ぶろろーぐ2

とある時刻、とある家庭にて。

ハイハイをする子供が居た。

もとい物語の主人公、相馬^{そつま} 響^{ひびき}である。

見た目は銀髪にオッドアイ。

彼の前世の生涯が閉じたのは中学2年。

まさしく厨二病に疾患してピークに当たる時期である。

そんな頃合に死んでしまった彼がそんな見た目になるのは当然のこととで、厨二病を脱する頃合。もとい7歳になる頃にはきつと自分の容姿に悶絶するだろう。「なぜあの時に、こんな奇抜な見た目を選択してしまったのだ!」と。

多分。きっと。おそらく。

してくれると良いな。

現在の彼は早速発情していた。

「……ふふふ。俺の母親がよもやこんなに美人だとは……近

親相 げふんげふん。も、悪くは無い。

何、俺のイケメンを持つてすれば……」

ドンビキである。

生まれて数年で母親とのチヨメチヨメを考える人間。

あまりの非常識ぶりに本当に貴様、日本人か?と問いたくもなるのだが、自然界では親と子の交配は至極当然のようにあるし、血統的にも問題は無い。

別に良いのでは?という気もしてきたのは、あまりの思考回路ゆえに彼を人間としてではなくその辺の獣と同列視してしまっている

いうことなのだろう。一応反省しておこう。
あれでも彼は人間なのだ。
それはさておき。

「あら？おっぱいが欲しいのかしら？」

母親である相馬 文香ふみかに遠慮なくむしゃぶりつくところを見て戦慄
しつつも思うのは、目が血走りすぎで怖いと言うことである。
目が血走りながら乳房をしごきつつ吸い付く赤子。
下手なホラーよりも怖い。

「……うますぎるっ！！」

と吼えながらも母親の乳房にがつつく響。

全国の赤子や君のような子供を産んでしまった文香に謝ってあげた
いほどにその姿は醜かったと言っておく。

これを見ても自然な笑みを絶やさないと母は母親は偉大である。

否、文香が偉大なのだろう。絶対。確実に。それしかない。
きっとそう思う。

そもそも彼の毛の色や目の色的にこれを我が子として愛せる彼女は
まさに聖母と言えよう。

「……くっ……いかん、もはや眠くなってきた。」

今更であるが彼の言葉は全て「あー」とか「うー」とかである。赤
ん坊なのだから当然のこと。

それを意識してお茶の間に届けているこの作業。
早くも苦痛と化してきたのだから気が滅入る。

そして彼はそのまま寝た。

寝る子はすくすく育つと言うがこのまま眠るように死んでくれたほうが世のため人のため。

何よりも罪の無い母親が救われるような気がする。

「ふふふ・・・凄い旺盛な食欲ね。」

ちゃんと食べたのを見て安心したのか文香は満面の笑みを浮かべた。母親としては至極真つ当なセリフなのだが、それが向けられた相手が彼となると複雑な気分である。

・・・ここに、ここに聖母がおるきん。眩し過ぎて目が開けられないんじゃない・・・

せめて彼女の元で彼が真つ当な道を歩めるよう、祈るしかるまい。

余談ではあるが母子家庭で父親は蒸発済み。

あまり良い人ではなかったそう。

ぶろろーぐ2（後書き）

全体的にブローグは短いです。

なぜかあまりネタが思い浮かばないもので・・・先のほう先のほう
はガンガン思いついているのですが。

よって、ちゃっちゃんと進めることにしました。

ぶろろーぐ3（前書き）

これにてブローグは終了。

ぶろろーぐ3

子が育つのは早いと言うが、それを証明するがごとく、あつという間に9歳となった響が居た。

彼が通うこの小学校にはヒロイン候補がいる。

言わずもがな、高町なのは、月村すずか、アリサ・バニングスである。

もちろんのこと彼は煙たがられた。

なぜかと言えば単純明快。

変態でキモイからだ。

さらに言えば残念ながら厨二病は治らなかった。

「やあ、アリサ、すずか、なのは。」

「お、おはよう・・・」

「・・・響君・・・おはよう。」

「いい加減殺したくなってきたわ。」

にこやかな響の挨拶になのは、すずか、アリサはげんなりとして応える。

いや、アリサは応えてなかった。いや、これはきつとアリサ流の返答なのだろう。

いいぞ、もっとやれ!!

大丈夫。ちょっとだけだから。ちょっと殺すだけだから。

今なら一万円上げるから。ね、ちよつとそこの人気の無いところに連れてってさ。

こっ、サクつとね？

「今日も可愛いね。」

「あ、ありがとう。」

「そ、そうでもないよ」

「・・・そんなことどうでもいいからとっとどっか行ってくれない？」

なぜここまで彼が嫌われているかと言うとそれは彼の目線の目線である。

簡潔に言うところ。

人間というのは鈍く見えても意外と敏感で、たとえば目の前で起こっているように相手が下心を持って近づいてくればもちろんのと分かる。

視線で、もろバレなのだ。

じろじろと撫で回すような視線。

変態じゃない彼女達にとつてそれは酷く不快感を与えるものだった。そうした下心を隠せる巧妙な男もいるが、こちらほど性質が悪くないのが唯一の救いである。

「ていうか、あんたどうしていつも私たちのところに来るのよ。毎回言ってるでしょ！寄ってくるなって！！」

「ふっ、野に咲く可憐な花を見に来てしまうのは、美しき蝶の宿命さ。」

「はあ？」

「ふくっ・・・くくく・・・美しき蝶ね？」

宿命とか・・・ふはっ！！

失礼。つい失笑してしまったのだが、次の問題がコレである。

これまた簡潔に言うならば意味が分からないことを言っているということだ。

思い出して欲しい。

彼女達は9歳児である。

そんな気障な話をされたところで彼女達の脳内では「野に咲く花に蝶が寄ってくるのは当然のことだよ」というそのままの字面で受けとっている。
すなわち。

「この話の流れでいきなり蝶の話されても意味が分からないんだけど？」

「おや？わからなかったのかい？」

ふふふ、初心な子羊ちゃん達だ。」

「ああ？」

アンタバカにしてんの？」

「あ、いや、そうではなくてだ。これは野に咲く可憐な花を君たちに例えてーーぶるはっ!？」

「あ、アリサちゃん。さすがに殴るのは・・・」

「いいからいいから、ほら、とっとと行きましょ。」

「ぐふっ・・・ツンデレか。現実のツンデレとはかくもシンドイものなのだな。」

こうして彼の勘違いは増えていくのだった。

というか、もっとやってくれないだろうか？

もっと熱くなれよ!!

どうしてそこで去っちゃうんだ!!

あとちょっとで殺せるんだぞ!!

もっともっとと熱くなれよ!!

あ、良い忘れたが彼の口調にも問題はある。

何よりも致命的なのが彼のその勘違いスキルにあった。

彼が煙たがられているにも関わらず接触を持つとするのは、別に嫌われていることに興奮する性質を持っているわけではなく。

ただたんに恥ずかしがっている、素直になれていないだけと考えているからである。

すなわち。

嫌われているのにも関わらずしつこく空気の読めない人間がこれまたしつこく話しかけてくる。

非常に嫌な出来事と言えよう。

そして、そんな彼の行動はとある結果をもたらした。

「てめえ、いい加減にしろよ！なのは達が嫌がってるだろっ！？」

「何を言う？」

君こそ彼女たちを開放したまえ。きっと君が脅しているのだろ？」

「はあ、はあああっ！？」

そう、新たな転生者による苦情である。

彼は原作非介入派であまり下心を持たず、なんやかんやでなのは達に気に入られた転生オリス。

なのは達に日々無自覚な嫌がらせをしつづける響に対して文句を言いに來たのだ。

なのは達がなんだかんで響を退け切れないのは彼が生理的に嫌いでも悪人では無いということに起因する。

相手に悪気が無く、なんだかんで直接的で決定的な害が無いために特別お人よしな彼女たちとしては彼を退け切れることは出来なかったのだ。

そんな中立ち上がったのが、チートオリスの彼、山田君（仮称）だ。

個人情報保護法のため、この場では仮名を使っている。

彼はいたって普通の両親の元に生まれ、原作怖いとか良いつつもご都合展開によってなぜかなのは達と近しい展開になったという背景を持つ。正直此方のほうが我らがバカな主人公よりも腹ただしい気がする。

原作介入したくないとか言っておいて、どうせがつり介入するんでしょう？

フェイトの母親に「なんでフェイトを娘と見てやらないんだー!」みたいな熱血な説教するんでしょ？

どの口で原作に介入しないとか言うのか。

いや、それこそが主人公体質と呼べるものなのかもしれない。

残念ながら響にはそれが無いようである。

そしてなぜか「名前で・・・なのはって呼んで!」みたいなフラグを立てつつも現在、響にとっては程遠いチートハーレムを形成しつつある山田君。

今回の案件も彼の好感度はうなぎ登りで、響の好感度は格段に下がることとなるだろう。

山田君はきつと「かませ犬ありがてえ」などと思っているに違いない。

と言ったら彼は怒ってこういうだろう。

「ただあいつらの笑顔が曇るのが見過ごせないだけだー!」

はいはい。主人公やってますねえ。

無欲アピールとか要らないです。

「は、話が通じねえ。」

「まあ君の気持ちも分かる。」

だがね。彼女たちが迷惑してるのは歴然たる事実であって――

「いや、だからオマエの行動が・・・」

その後、結局平行線のまま話は終わった。

そんなある日のこと。

彼の勘違いが解ける日がようやく来たのである。

発端は放課後。

彼のチートの一つにおっぱいチートと呼ばれるものがある。

彼が求めたチートで恐らく未来永劫誰も望まないであろうチートだ。そのチート内容とはおっぱいを自由自在に操ることにある。

色々語りたいのは山々であるが、それは後の機会に譲るとして、話を進める。

そう。

あろうことか彼はなのはのー幼女の胸を揉みしだいたのだった。そこに至るまでの経緯はあまりに見つともなく、しようもなく見ていられなかったので省くが年頃　とまでは行かないが女の子が胸をイキナリーーそれも嫌いな男に揉まれたらどうだろうか？もちろん怒る。

下手をすれば精神的な傷。もといたラウマも与えかねない。

彼はそんな致命的かつ最低なミスを犯してしまったのである。

もちろん彼は無理やり揉むなどと言う外道ではない。

勘違い野郎ではあるものの、よくも悪くも日本人なのである。

悪人ではないし、そんなことを考えたことも無く、むしろ女性関係に関しては初心なくらいである。

歯の浮いたセリフを吐けるのも、彼女たちがまだ小さく、幼女だからであり、忘れていかもしれないが記憶を持ったまま転生した彼にとっては娘のようなー歳の離れた妹のようなもの。

なんだかんだで別に欲情していたわけではない。
というか当然のことである。

しかし――いや、それがゆえに悲劇が起こった。

彼の認識ではあくまでも好かれていていると思っている。

なおかつ、自分よりもはるかに年下の――もとい今はまだ子供としてしか見てない、なのは。

彼は善意で将来的に胸が大きくなるようにチートを発動させておこうと思ったのだが、それが良くなかったのである。

とても身勝手に自己中心的な善意。

すなわちありがた迷惑は無常な現実として彼の身に迫った。

大問題となったのである。

まだ二次成長も迎えてないとはいえ女の子の胸をがつり揉みしだいたことで親御さんにも伝わり、もちろん彼の母親の文香にも伝わった。

なのはなのはで号泣。

先生にも伝わったし、すずかやアリサは完全に軽蔑する眼差しをむけるようになり、彼の一切合切を無視。

なのはなのはでしばらくの休校の後、復帰。

彼を避けるようにはなったものの、なんとか立ち直ったようである。

もちろんクラスのほかの子にも伝わり、あらゆる場面へと彼の行動の結果が伝播した。

虐めを心配した文香が転校を薦め、響も転校を望んだ。
そう。

彼の勘違いは1人の女の子を泣かせてようやく解けるほどに重症だったのである。

もちろんのこと、彼は嘆いた。

泣きながらに謝った。

許してもらおうだとかそんなことは微塵も考えず、ただただ申し訳なさで一杯でひたすらに謝った。

もちろんなのは父親や他家族はそれで許せるはずも無いが、子供のやることとして許したと言うことになった。そうしたけじめを付け。

彼はなのは達が通う学校を後にした。

彼の後姿はまるで別人のようだったという。

主人公の一日（前書き）

このまま三人称でいくか、主人公視点にするか。迷い中。
その件に関して感想をいただけると嬉しいです。

主人公の一日

あれから半年の月日が流れた。

彼はと言うとそれはもう、猛省した。

『大丈夫ですって。そろそろ頑張ってみましょ？』

「そうだろうか・・・アイシテル。俺は怖い。また大きな罪をこの手で犯してしまうのを・・・」

『はい、その言い回しは厨二くさいので直しましょうね。』

「・・・俺は厨二じゃない。もう目が覚めたし。」

『厨二の人は誰もがそう言うの。』

今彼が居るのは自室。

神様から貰ったチート特典の一つ。

神様に用意してもらったデバイス“アイシテル”と話している。

二対のナイフ型デバイスであり、片方はベルカ式でカートリッジを搭載しているため、非常にゴツイ。

もう片方はすらりと長いスリムなミッド式の魔法が組み込まれたナイフである。

近接戦や身体強化に置いて優れているベルカと、小手先や技術、手数之多さに優れているミッド式。

どちらの魔法も満遍なく十二分に使えるという特殊なデバイスである。

待機状態はナイフを模ったネックレス。服の下に入れておけば一番目立たない形である。

普通のインテリジェントデバイスよりは遥かに感情豊か。

ちなみにドイツ語を喋っている。

良い機会なので彼のチートを振り返ってみた。

まず一つはその容姿。

銀髪オッドアイ。

しかし、これは現在では意味を成さなくなっている。

アイシテルによる変装魔法で一般的な黒髪黒目の人間にしているのだ。

理由は言わずもがな。

二つ目は神様印のデバイス。

アイシテルの性能は下手なロストログアよりも強力で、ジュエルシード並みの魔力貯蓄機能があったりとチートらしいチート。なのだが、どんなスーパーコンピューターも扱う人が幼児並みの知識と能力値しかないのでは宝の持ち腐れ、豚に真珠、ぬこに小判、というもの。

一度もセツトアップしたことが無い。

彼はこの世界について美少女がヒラヒラした服を纏って飛び回る。

程度の認識しか持っておらず（逆に言えば彼にとってはそれが全てであり、それで十分だった）、そもそもデバイス自体この世界のコンピューターだとは考えていない。

もちろんこの時点からして勘違いなのは言うまでも無いことである。何が言いたいかと言うと、彼はデバイスを単なる便利な魔法が使える生活を助ける道具、程度にしか考えておらず、戦いに使えるなどと微塵も灰燼も気づいていないのだ。

そしてそれを知りつつも面白そうだと言うことで放って置くアイシテル。

これまた現状では使えないチートである。

三つ目は言わずもがな我らが夢。おっぱいチートである。

よく考えて欲しい。

全てのヒロインに直面する絶対的な悲劇とはなんであろうか？

・・・引つ張る意味も大して感じられないので早々に明かしてしまうが、それは「老い」である。
どんな可愛いヒロインも時が流れれば老化し、言い方は悪いが劣化する。

いつまでも若々しい姿で。

これはほぼ全ての――容姿に自信を持つ人間であるほど必ず抱く欲求の一つではないだろうか。

もちろんアニメを見ていいると言う立場であるならばなんら問題は無かったのだが、同じ世界に現実として生まれた以上はそうしたヒロインの姿も見なければならぬ。

自然の摂理とは言え、それを解決する手段があれば望んでしまうのが人の業という物だ。

耳障りは悪いがおっぱいチートはそんな夢を叶える最高のチートと言える。

劣化によって垂れるおっぱい。

垂れたおっぱいは二度と戻らないと言うのが現在の学説で、事実そうである、らしい。

巨乳キャラであればあるほど何十年後かにお世辞にも綺麗とは言えない肢体を晒す事になる。

もう少しオブラートに包むべきなのだろうが、どんなに言い繕っても厳然たる事実であり条理である。

ゆえに目を背けるようなことはしてはならない。

二次元に置いてはそんな心配はいらなかったものの、その世界に暮らすとなれば10年、20年と先があり、魔法的な何かが無ければ等しく老いさらばえ、おじいちゃま、おばあちゃまと化する。

加齢臭もするだろうし、皺も増えていく。

背骨が曲がり、筋肉や脂肪がこそげ落ち、歩けなくなるかもしれない。

だが安心してくれ。

このおっぱいチートは微乳、ひんぬう、巨乳、爆乳、横乳における曲線美の調整や下乳において良く見えるように脂肪の配置や柔らかさを微妙に変えることによってうんぬん、あのキャラが巨乳であれば、ひんぬうであればという願望を叶えることもできる「おっぱいを操る程度の能力」ではあるがその能力にはレベル2があり、そのレベル2はまさしく神の御業とも言うべき効果を発揮する。そう、名づけるとしたならばアンチエイジングEXである。

アンチエイジングとは意識し、分かり易く簡潔に述べるならば老化防止のことを言う。

とはいえ生きていけば老化していくのは自然、老化しないのは不自然である。

防止と言うよりは抑制といった方が正しいか。

そんなアンチエイジングの効果を極限まで高め、全く別物し、上記の正しく老化“防止”を実現させたおっぱいマッサージ。それがレベル2の効果だ。

具体的なメカニズムを語るのは省略するが、とにかく凄いおっぱいマッサージで老化を防止し、どうにかしておっぱいの時を止め、しかしおっぱいはおっぱいという単体の生き物ではない「ゆるえ」に体にもその時の留まりが影響し、すなわち寿命で死ぬことは無い不老と化す能力。

畏怖されるべき異能^{レアスキル}である。

戦慄してくれても構わない。狂喜乱舞してくれても構わない。

どこぞの学園都市であるならば女性研究者によって研究され尽くすであろうこの能力。

おっぱい「いや、胸を揉めば男にも効果を発揮する正しく等しく全てのおっぱい」男の場合は胸とする「」をチートさせるこの能力。

もしばればれば比喩ナシに真面目に解剖されるに違いない。

と熱心に語りすぎたところで閑話休題。

彼は自室でアイシテルと話しながらもとある本を読んでいた。

『猿でも分かる乙女心』

そう、彼は勘違いスキルを消し去ろうと努力しているのである。
涙ぐましい努力。

その姿に拍手をせざるを得ないが、したところでなんだというのは
明白。

とりあえず拍手は自重した。

「アイシテル・・・乙女心はかくも難しいんだな。」

『それを読んで分かった気になってたら、また勘違いするよ。きつ
と。』

「・・・どうしてそういうことを言うんだ。頑張ってるんだから応援
してくれれば良いのに。」

『だって・・・せっかく間近で勘違い系主人公の滑稽な姿を楽しめる
からと神様に志願したのに。結局良い子ちゃんっぽくなってるん
だもん。私つまらない。』

デバイスは志願制らしい。

「・・・俺を怒らせると酷いぞ?」

『どうするっていうのよ?勘違い坊や。』

「納豆ごはんに混ぜ込んでやる。」

汚いと思うよ？

そして君は金属の塊を食べようと言っただろうか？

『ぶふっ！？な、なんていう鬼畜。げ、外道っ！！外道だわっ！？
私の美しいボディが納豆菌で汚れるじゃないっ！？』

「嫌だったらこれを教える。」

『ん・・・何々？

葛藤？これが何？』

「かつとぅーっって読むんだな。」

『・・・』

デバイスがアホの子を見る目で見つめた。
目、無いんですが。

「しょ、しょうがないだろっ！？

中学二年の時に死んだんだから、学があるわけじゃないんだよっ！
」

そして彼は本を読み終わるとおもむろに胡坐をかき、手を股のあたりに置く。目を瞑って身じろぎもなくなる。

瞑想である。

ちゃんとしたオリ主であれば瞑想と聞けば「体内の魔力を感じ取る訓練か！」とティンと来るものだが、彼の場合は違う。

彼女達の将来が楽しみがゆえにいついエロい視線を向けていた――もといこの色欲を抑制する訓練である。

まず彼は魔力がどうかというよりもその人格の矯正から始めた。アホである。が、切実な問題でもある。

瞑想をし、できれば悟りを開くのが目的だが、ドウ考えてもそれは無理に違いない。

彼の思考回路を除いて見る。

おっばい・・・無限のおっばい・・・

いや、待て待て。

おっばいは違う。おっばいなんていないんだ。

だがしかし、おっばいというのは如何せん俺の心をつかんで離さない。

これほどまでに拒絶してもおっばいが出てくるということはもしか俺の心に巢食うおっばいはただのおっばいじゃないんじゃないだろうか？

きつとおっばい型宇宙人などが俺の精神から侵略し、体をのつとり、俺の体のいたるところをおっばいに変えるに違いない。

それは嫌なようで嬉しいかもしれない。

そもそもおっばいチート自体、おっばいを揉むための口実がたら貰ったようなものだし、自分の体がおっばいとなりえるなら誰かのおっばいを求めて徘徊せずに済む。が、自分の体のおっばいで俺は満足できるのだろうか？

おっばい神としてーいや、おっばいの神を名乗るのはまだ早いのか。

最低限おっばいスカウターの技術を会得しなければー

というかおっばいを考えていたら肉まんが食べたくなってきた。

あの白い肌にホカホカの具。正直肉まん神。チヨコまんなるものもコンビ二に売っていた気がする。

チヨコまん。中々惹かれる。そういえば犬にチヨコを与えるといけないとか聞くが一体どうしてだろうか？

ネギもそうだったな。あ、ネギはあれか。ユリ科の植物か。

ユリ科の植物には毒が含まれてるとかなんとか。だからかな？たま

ねぎやネギは大丈夫なのだろうか？

今まで食ってたんだけど・・・いや、そもそもユリ科の植物だっけ？

非常にドウでもいい思考回路だった。

結果から言えば一年後ぐらいには彼はなんとかエロから脱する。
頑張ったね・・・うん。

「ご飯よお。」

下の階から母親の文香が晩御飯に呼ぶ声が聞こえる。

こうして彼の一日は終わる。

プレシアテストロッサ

P.T事件の始まりはすぐそこである。

巻き込まれ始めた

「なにこれ？」

歩いていたら何かに出くわした。

黒い形にネコーーいや、ぬこの目をした珍妙な生き物である。
なんか触手が生えていた。

「・・・こういう生き物もいるんだなあ。」

響はそんなことを呟く。

もちろんそんな生き物がはびこるような世界ではない。

「うおっ!？」

『ぷろてくしょんっ!』

触手が響に襲い掛かるがそれを基本魔法のプロテクションで防ぐアイシテル。

響は少し焦る。

目の前の黒い塊は何らかの生き物にジュエルシードが憑依した姿。
寄生、共生?なににせよ合体した姿だ。

合体したからといってなぜこんな形になるのかが意味不明であるが。

「こ、こんな気性の荒い生き物がこの街の近くに居たとは・・・知らなかった。」

『何言ってるの。これは生き物というより魔法生物なのよ。』
「ん？」

生物には変わらないんでしょう?」

『そうだけどそうじゃない・・・というかそれどころじゃないとい

うか。ほら、キタっ！！」

「はっ？」

つてぎゃああああああっ！？」

さらに触手を増やして攻撃を続けてくる黒い塊。

アニメであるならばただ黒いだけだが、いまやこれは現実として目の前にある。

うごめく体はどうも肉質的で結構気持ち悪い上に、そこかしこから触手が生えてそれが突き刺そうと襲いくる。そして目玉は大きいのがそのまま実写化されたもので、正直下手なホラーよりもグロイ。当然のごとく一般人気質の響は声を荒げた。

そして逃げた。

『ちよ、ちよつとっ！？』

た、戦わないのっ！？」

「あれと！？バカじゃないのっ！？」

あんな意味不明な生き物と戦うとかバカかっ！？」

『誰がバカとっ！？』

所詮私の玩具のクセに私をバカにするとは・・・ちよつと生意気じゃない？」

「誰が玩具かっ！？」

とか言い争いながら逃げる響。

そして触手に足をとられた。

「や、やばっ！？」

え、これ？どうされるの？何されるの？

食べられちゃう？頭から丸齧りですかっ！？」

『ふふふ・・・ざまあ。』

「ちよ、おまつ！！食われる前にアンタだけは壊すっ！！！」

『そんなこと出来ないでしょうに。ほら、手まで巻きつかれて。』

「うっおおおおっ!？」

しまったあああっ!!手が・・・手が引つ張られるっ!？」

『そのまま丸齧りされてね、響。』

「ちょ、えっ!？マジで助けてくれないのっ!？ていうか助けられるっ!？」

『確かに助けられる。でも嫌。』

「えっ!？だめもと言っただけなのに・・・最近のパソコンパナイね。ていうか、助けられるんならハヨう助けんかっ!？」

『ええええええ・・・気分じゃない。』

「気分で人助けとかどんな鬼畜ですか。ホントまじ助けてください。」

『ていうか、さっき助けたから良くないかな?』

『いやそんなこと言ってる場合じゃなーいやばっ?ほんとマジやばい、やばすぎる。お願い、ほんとお願い。お願いだから助けー!ぐおおおおおっ!？間近に牙が、牙が迫ってるっ!？

ていうかこんな場所に口があつたのかっ!!ヒトデみたいなやつ・

・とか言ってる場合じゃなくてだなっ!!

も、もう・・・ほんと限界。』

閉じようとする口に手を当ててなんとか閉じられないようにと頑張っているのだが、如何せん態勢が悪い上に腕もぶるぶるしてきた。

彼の精神年齢は20台ちよつとであるが、肉体年齢はあくまでも9歳なのだ。

それでも仮にも動物のアゴの力に耐えられてるのはさりげなくアイシテルによる肉体強化の魔法があるからである。

しかし、このままでは黒い塊の糞と化してしまう。

「くそおおおおおっ!!こんなはずじゃなかったのについていいいいっ!!!!」

悪役が死に間際に発するようなセリフを言ってプルプル震える腕が外れそうになる。

さすがにみかねたアイシテルが助けに入ろうとするがそれよりも重大な案件が発生した。

もとい元祖主人公である高町なのはの登場である。

本来の歴史とは打って変わって、すでに变身済み。

なおかつリンカーコアを求めるこの黒い塊に襲われるのはユーノであり高町なのはであるはずだった。

そこへ通りかかったリンカーコアを持つ生物。

もとい響は丁度言い獲物であったのだ。

その戦闘時の余波をかぎつけたユーノ・スクライアがなのはに助力を請い、レイジングハートを手に取りやってきたというわけである。

「きゅ、救援かつ!？」

人の気配に振り向いた瞬間、響は固まった。

当然である。気まずさゆえにだ。

そこで響が起こした行動はもちろん。

「や、やばい・・・よりやばいぞ・・・っていつまで噛み付こうと
してんのっ!!」

邪魔だあっ!!」

目の前の黒い塊を触手に纏わりつかれながらも蹴っ飛ばし、その辺の庭の草むらに隠れることだった。

火事場のなんとやら。というやつだ。

「戦略的撤退と言うやつだな。うん。」

『逃げてばかりじゃだめだと思うよ?』

「やかましい。これは俺のためではなく、彼女のためだ。夜の街を飛行しているところ、いきなりいつぞやの変態が現れてみる。むしろ俺を見て逃げかねんだろう?」

『・・・確かにそうかもしれないけど可哀想なくらいにみじめな気遣いね。』

「・・・うるさいやい。」

『というか飛行してることに突っ込まないの?』

「え?ああ、そういえば飛んでるけど・・・すごいテクノロジーだな。オマエといい、今の地球はやたらとか科学力が高いみたい。空も飛べるのかあ・・・アイシテル、俺も飛べないの?」

『飛べるけど・・・普通に受け流すのね。』

シューティングゲーム

「死んだ時にこの世界は空を飛んで弾幕芸をする少女達がいると聞いていたからな。」

『しゅ、シューティング・・・』

「あ、それより見てみる、なんか倒したみたいだぞ。」

「いうか、今更だけどあの黒い塊って何?それと気のせいじゃなければフレットらしき動物が喋ってる気がする。」

『とりあえず帰らないの?』

「そうだな・・・すごい疲れたし、腕ふるふるしてるし今日は早く寝よう。」

『んじゃ結界抜けるね。』

「なんか良く分からんが了解だ。どうせなら空を飛んで帰りたい。」

『はいはい、ええと空を飛ぶやり方は・・・』

こうして響はリリカルでマジカルな世界に片足を突っ込むのであった。

「これ、やんなくちゃだめなの？」

『また襲われるかもよ？』

さて、俺はというと特訓することになった。

なぜかというアイシテルの話によるとまだこんな感じの出来事が起きるらしい。

じゅえるしーどとか言う厨二な名前のアイテムが街のあちらこちらに落ちたとか何とか。その結果なんちゃらかんちゃらとか。厨二過ぎて聞いていられなかった。

よく分からないが、あんな生物に襲われるのは勘弁なので少なくとも逃げられるような魔法は使いたい。

「えーっと、まずは何々？」

アイシテルセットアップと言いましょーう・・・とな？」

そのためにもアイシテルの取り扱い説明書を読んでいる。

アイシテルが口で説明するのが面倒だから勝手に読めといわれて作られた冊子である。

こんなことを言えと要求してくるとは。

アイシテルだって厨二じゃないか。

「アイシテル・・・せ、せつとあゝつぶ。」

小声なのは仕方ないよね。

恥ずかしいし。

すると胸のアイシテルがぱつと光り、アイシテルから自信を守る強靱な衣服をイメージしろとかいわれた。

強靱な衣服ってなんだよ。

綿100パーセントの服じゃ駄目と言うことだろうか？
ポリエステル繊維を使えと？

『そういう意味じゃないっ！あほっ！！』

もういつそのこと鎧でいいじゃんと考えたら服が脱げた。

・・・なぜ？

意味が分からない。

上着が溶ける様に消えていき、次にズボンが溶け消え、パンツが最後にはじけ飛ぶ。

確かに魔法少女的なアニメの変身シーンでは脱げるのがセオリーだが、男の子でも変わらないのだろうか？

そして体が西洋鎧に包まれる。

俗に言うフルプレートメールで、肌の露出部分が無くなった。

そしてゴツイナイフが一本とすらりとした眺めのナイフが一本。

両手に一本づつ出現した。

「ゴツイナイフとはいえ、西洋鎧姿には合わくないか？」

『ならさらに剣もイメージして腰に差して置けば？』

「じゃあそうしよう。」

うむ、なんかそれっぽくなった。

ただ身長が足りないのになんか気持ち悪い。

『じゃあその姿のまま裏山にでも行って見ましようか。』

「裏山で練習？」

『そゆこと。』

てなわけでパツと移動して裏山。

取り扱い説明書にしたがって順々に練習していく。
とりあえず一度使ってみることを目標にさまざまな魔法をやっ
ていくと、重大なことに気づいた。

「・・・なんか攻撃系多いな。」

『そらそうでしょう、私アームドデバイスだし。』

「デバイスなの？」

『いや・・・だから・・・まあいいか。』

とにかくさつとやってみたわけだし、模擬戦といこうか。』

「模擬戦？」

いや、別に戦う必要は・・・」

『あまああああああああいつ！！』

「おおっ！！」

『もし誰か惚れた女の子が出てきたらどうするのっ！？』

オマエだけは俺が守ってやる！的なセリフを言ってみたくは無いの
っ！？』

「・・・た、確かに。むしろ積極的に言いまくりたい。」

「でしょっ！！」

やばい、かつこいいんじゃないだろうか。それ。

そうと決まればさつさとやろうっ！！

『んじゃ今、出すから。』

何を？

「なはっ！？」

目の前に音を発てて現れたのは銀髪オッドアイのーーいつぞやの

俺だった。

野郎が何見てんだコラ的な目線をくれている。

「あ、あてつけか？」

『おつとと、間違えちゃった、テヘ！』

「・・・まあ良い。模擬戦ということならばこいつに斬りかかって問題ないんだよな？」

『まね、そう簡単にはいかないだろうけど。』

「・・・ふふふふ。よしきた。殺そう。こいつを殺して俺は過去から決別するんだ。」

すらりと腰から剣を抜く俺。

そしてそれを見て、銀髪オッドアイのーイータイやつも虚空から剣を出した。

「俺に挑もうとは・・・バカなやつだ。なのは、見ていてくれ。今俺がオマエに纏わり付く蛆虫を殺してやるからな。」

「殺せるもんなら・・・っておいしいいっ！？」

『何？』

「いや、何じゃないよっ！？」

あれのセリフどうなってるのっ！？ていうか彼女、今ここにいないよねっ！？」

『半年前の響を再現してみました！』

「せんでいいっ！！ていうか、あれか。これを倒すまでこれを相手しないといけないの！？」

『もちろんサア！』

「お、おまえ・・・ほんと鬼畜な。」

げんなりする。

とつとと斬り捨ててしまおう。

そうだ、それがいい。

「せいやつ！」

「ふっ・・・さすが非モテ君だ。剣筋がなっちゃいない。」

「ごはっ！？」

オマエも非モテだろっ！と思いつつ。

振った剣はかわされて、俺に向かって俺が蹴りを繰り出してきた。しかし俺は負けじと態勢を立て直し、俺に向かってもう一度しかける。

俺はその銀髪の髪を気障ったらしくかきあげ、俺に向かって再度力ウンターを放つ。

しりもちをつく俺。

そして愚者を見るかのように見下してくる俺が目の前に突っ立ている。

非常に腹が立つ。

ていうか、俺が相手だとややこしいなっ！？

とりあえず目の前のコイツは厨房と呼ぼう。

で、厨房は俺に向かって

「僕としたことが・・・つい本気になってしまった。許してくれたまえ。」

殴って良いだろうか？

というか殴れないんだっただ。こいつ俺のくせに強かった。

魔法とか魔力とか使って思いつきり忌々しい過去ごと吹き飛ばすつもりで攻撃しても死んでくれない。

俺は日が暮れるまで厨房に斬りかかり魔法をうちまくったのである。

フラグが立ちそうで立たないんだ

困ったことに厨房に手も足も出なかった響。

その晩、彼が枕を濡らしたのは言うまでも無い。

さらに一週間ほどが経ち、段々剣を振るのに慣れてきたかな〜と思っ
ていると、なにやらひし形の宝石のようなものを拾う。

そして響の目の前には金髪の美少女が。

フェイト・テストロッサ。その人である。

「それを渡して。」

鎌状のものを向けられ、焦る響。

だが、響も慣れた物。

訓練でちよつと強くなっていた気がした響は調子に乗っていた。

「むむっ！なにやつっ！！」

瞬時にアイシテルをセットアップ。鎧を発現させずにナイフのみを
手に持った。

調子乗っているとはいえ中身が中身。もちろん戦う気など無く、単
にビビって武器を構えたというのが大きい。

少し逃げ腰になっているのが哀愁を誘う。

「・・・渡してくれないなら力づくでー！」

「はいどうぞ！」

では、さようなら！！」

「・・・あ、ありがとう。」

カチャと武器を構えたフェイトにビビった響は即ジュエルシールドを

渡す。

響は小声でアイシテルと相談した。

「・・・ちょ、この子この歳で武器持つて脅し取るとか!？」

「きつとろくな教育をされなかったのね。かわいそうに。」

「それ以前に表情を全く変えないあの余裕・・・強者とみた。」

「ええ、響よりも大分魔力が高いね。振る舞いもデバイスを振るうことに対する慣れがある。」

「魔力つて・・・デバイスを動かすのに必要な力だったよな？」

「そうよ。」

「では彼女の持っているものもデバイスだったりする？」

「そうね。」

「また武器か。・・・もしかしてデバイスってパソコンの進化型とかじゃないの？」

「今更すぎてデバイスの私は涙目。」

「き、気づかんかった。」

「・・・。」

「まあまて、ほら。一度死んでるからさ。死んでた間にそんな感じの物が出てきたのかなあとか思ってたわけ。」

「・・・それにしても気づくと思うけど。他の人は持つてなかったじゃないの。」

「いや、高級品なのかなあって。」

「・・・。」

「まあいいじゃないか!ほら、結局のところアレでしょ？」

アレアレ。あの・・・あれだよ。デバイスってのは魔力とやらを持つものが使える護身用の武器とか・・・そんな感じでしょ?それを脅しに使うとは・・・許せん。彼女のためにも説教してくる。あのままでは将来的に犯罪者の仲間入りしかねない。」

「・・・止めはしないけど。」

響はこうしてアホな行いへと走るのである。

ちなみに彼女はすでに犯罪者の仲間、というか娘である。

「ちょっとその君。」

「・・・何か用？私は忙しい。」

ちよつとイラツとしてる気がする。

反射的に謝りそうになったけれどそこを我慢する。

「い、忙しいところ申し訳ないんだけどイキナリ武器を構えて脅し取るのはどうかと思うんだよ、お兄さんは。うん。」

「貴方から構えたのに？」

「え？」

そうだっけ？

「そうだよ。私から構えたわけじゃないし、望んで貴方に危害を加えようとしたわけでもない。」

「そうだったか・・・あ、えと・・・だからといって・・・」

「・・・話すことは何も無い。それじゃ。」

「あ、はい。」

そのまま去っていくフェイトを見送る響だった。

「俺、間違ってたか？」

普通に考えてあんな怪しいコスプレして鎌っぽいのを持ってるやつが居たら警戒してしかるべきだよな？」

『・・・とりあえず帰ろうか。』

「・・・うん。どうでもいいよな。正直言つとお近づきになりたい

とか思っていたのだが。」

次の日。

響は図書館にいた。

猿でもわかる乙女心を返しに来たのだ。

「次はどんな本を借りるべきか・・・乙女大図鑑・・・乙女はこうして男を選ぶ百選・・・女の子は複雑なのだ・・・女子の憂鬱・・・女の子の気持ち・・・全部借りるにも小学生は一冊のみだし。」

返し忘れなどを防止するために図書館では年齢に応じて借りれる冊数の上限が決まっている。

小学生は一冊までだ。

「つと、あ、すいません。」

「こちらこそすいません。」

本棚を見ながら横歩きをしてると人とぶつかる響。

響の視界にまず入ったのは紫色の髪の毛。

紫とか人類的にありえないなあとか自分のことは棚に上げて少し驚く響。

今では黒髪黒目としているのだが。

「・・・というか紫とか懐かー！ーおおうつ！？」

「あの、どうかしましたか？」

瞬時に顔を逸らした響。

月村すずか。彼女はちらほらとこの図書館にやってくる常連さんである。

響は響で毎度のごとく焦る。

最近焦ってばかりだなと内心思いながらも響は気づかれないようにと声を若干高くして、なおかつ顔は俯いて顔のつくりを分らないようにした。

どおりでどこかで見たことがあるわけである。

「いえ、別にどうもしないです。んじゃ、俺はこれで・・・」

「ん？あ、でも本は良いんですか？」

「あ、いえ、見つからないみたいなので・・・出直そうかなあと」「職員さんに聞けば良いと思いますよ？」

「いえ、その・・・あの・・・人見知りなので・・・それでは。」

その場から離れるためのとつさの嘘であるが、俯いてることと言い挙動不審気味なところと言い、すすかは納得し、それならば。と手を合わせて提案する。

「・・・うん。なら私が変わりに聞いてあげましょうか？」

「エ？いや、あれですあれ。そんなことしてもらうのも・・・」

「別に気にしないで良いですよ。ついでに私の探してる本も聞くつもりですし、気にしないで下さい。」

「・・・すっごいエエ子や・・・」

「え？」

「あ、なんでもないです。・・・まあそこまで言っならお願いします。」

重ねて言うが彼は悪人と言うよりは善人よりである。

そんな彼が他人の親切をつっけんどんに跳ね除けることは出来ず。しかも見ず知らずの人に親切をするという今時の若者には珍しい心優しさに感涙し、自分の昔と彼女とを比べながらその酷さに嗚咽しかけつつも、響はなんとか彼女の親切を受けることにする。

実際困っていたのは本当で、司書さんに聞こうと思っていたところでもあるため聞くことに関してはなんら問題は無い。

「あの、すみません。」

「はい、なんですか？」

「えーっと私は動物のーー特にネコに関しての本を読みたいのですがーー」

いや、問題はあった。

響は気づいたのである。

俺の借りる本の内容はちよつと聞かれたくない。と。

別に職員さんならば構わない。

わざわざ職員にまで気遣ってたら図書館で本など借りられない。知られたく無いという思いもあるにはあるがそこはやむをえないことだ。

借りる際にどのみち見せなくてはいけないのだからして。

だが、彼女に関しては別である。

普通に気まずい。

とっても気まずい。

一応同年代の女の子　ではあるものの中身的には妹とか娘とかそんな感じの歳の子。

この歳　といつても9歳だがーーで子供に自分の情けないところを曝け出すようで非常に恥ずかしい。仮に同年代でも恥ずかしいけれど。

確かに響の昔はアレであった。

アレ過ぎていたが今は少なくとも改心し、直していくべく頑張っている最中なのだ。

今の自分にそのような羞恥プレイはレベルが高すぎる。

目の前の少女が少年であればまだマシだったものを。

ゆえに彼は致命的な一手を取ってしまう。

「それで、貴方は何を借りにきたの？」

「え、お、俺は・・・えと・・・アレだよ、あれ・・・えーっとネ、ネコの本かな？うん！！」

ここだけで見れば見事な回避とも思うが、チョイスがダメだった。

「へえ、貴方ネコを飼ってるの？」

「え、い、いや、ネコを飼いたいとは思ってるんだけどね？あ、でもそうそう気軽に飼おうと思ってるんじゃないよ？」

ほら、動物は生き物だから可愛いだけじゃなくて飼う上での辛いことや気をつけなくてはいけないことが多々あるだろうし・・・だ、だからかな？まずは本を見てネコのことを良く知らなくちゃって思っ
て・・・」

ネコを飼いたいと言われ、下手に嘘を付くとばれると思ったか響はまだ飼っていない事にしてネコについて詳しく知らなくても問題ないように嘘をついた。

とっさの嘘にしては理由がしっかりしていて内心ほくそえみ、完全に誤魔化せた！と思ったのもつかの間。

「・・・すごいなあ、その歳でそこまで考えてるなんて。」

私も始めてネコを飼う時にお父様にそれを言われたの。立派だなあ。

「君も同じ歳でしょ？」

「え？あ、うん。だからこそ余計に凄いなだよ。」

といって微笑む月村すずか。

その笑顔につい赤面する。ことは無かったが本当に良い子だなあとちよつと泣きそうになる響である。

もちろん昔の自分の酷さがあるゆえにそれと比べて自分が一体どれほどアホだったのか。

情けなさ過ぎて悲しくなったのだ。

そしてこの嘘が響の首を絞めることとなる。

職員さんに案内されつつ、道中で話しつづける2人。

「ねえ、貴方のお名前は？」

「え？あ、俺は・・・相馬ひー」

「相馬？」

「あ、いや、そ、そそ、相馬ひかりだよ。」

危なかったと小声で呟く響。

『それにしても気づかれないものね。意外と。』

「・・・多分それだけあの髪と目の色が印象深かったって事でしょ・
・あまりの性格の違いに同一人物だと思われてないってのもある
だろうし。」

念話で会話をする響とアイシテル。

余談であるが先ほどの嘘はアイシテルが念話で響に指示したものである。

もちろんアイシテルは今回の嘘の悪いところを理解して敢えてこの指示をしている。

アイシテルはお茶目なのだ。

お茶会に誘われて

「ねえ、ひかり。このネコはどう？」

「こ、これはまた可愛い・・・なんだこの可愛さ。」

あれから一ヶ月ほどが経過した。

現在2人で仲良く読書中。

なぜこうなったかは特に語ることも無い。

共通の趣味。

それは友達作りや合コンでのきっかけとしてはあまりにもポピュラーでセオリーで常套手段である。

そう、ネコ。

ネコの話に響が――正確にはアイシテルが響に乘らせるように誘導してしまったのが運の尽き。

いや、今はまだ美少女だが将来的に確実に美人となる女性と接点をもてたのだから男としては喜ぶべきである。

事実、響は喜んでいる。が。

それと同時に悲しんでもいる。

彼女に会いたくなかったのは言うまでも無く高町なのはと彼女が親友であるから。

親友を傷つけた人間に友好的に接するような人間はいないだろう。

ゆえに彼女と友達になったところで本名を明かしてしまえばそれだけの関係なのだ。

どの道彼女にフラグを立てて、イチャラブすることは叶わない。

そのことに嘆き苦しんでいた。

不幸中の幸いといえばネコの本が意外と面白いということである。

気づいたら普通にネコ好きとなっていた。

「あ、そつえばね？」

「ん？何。」

「今週末にお茶会があるの。ひかりも来る？」

「・・・うつむ。」

「何か用事があるかな？」

「いや・・・その。別に暇ではあるけどさ。」

響が渋り理由は言わずもがな。

彼女のお茶会に誰が来るかと言うこと。

2人きりでお茶会をするなんてことはまずないだろう。

それならお茶会というよりも普通に食事である。

「他に誰が来る？ていうか来るよね。確実に。」

「ええと・・・アリサちゃんとなのはちゃんていう私のお友達とそのお兄ちゃん。あとはなのはちゃんと特に仲の良い男の子も来るの。大丈夫だよ？きつとすぐに仲良くなれるから。」

「いや・・・遠慮しておくね。せつかくけども・・・」

「どうして？」

「いや、だから人見知りだと何回言えば・・・」

こうして誘われるのは何回目か。

響はこれ一度きりではなく何度も誘われていた。

その都度断ってきたのだ。人見知りという理由で。

もちろん響とて行きたいことは行きたい。

別に人見知りではないのだし、美少女達と、将来のおっぱーいげふんげふん。と近づける良い機会である。

下心を無しにしてもこんな良い子達と友達になれるのは光栄だ。

だがしかし。

もしバレたら？と考えると如何せん足が動かない。ばれないとは思うものの、ばれた際のリアクションを考えると非常に気まずいのだ。

すずかだけにバレルのはともかくとしてもなのはにアリサまでいるとなるとせつかくのお茶会が台無しになってしまふ。

そんなことになってしまふと響のみならず、彼女達も気まずくなるだろうし、十中八九お茶会どころではなく。

ばれたときの状況を考えると非常に気が進まないのだ。

というわけで。

「ごめんね。悪いけどこの話は無かったことに・・・」

「・・・どうして？」

「え？」

「毎回思うんだけど、ひかりって私の事嫌い？」

「い、いや、別に。」

「その割にはどこか壁を作ってる気がする。」

「そ・・・そうかな？」

「お茶会、そんなに行きたくない？人見知りだって早めに直しておかないとこれから先、苦労するよ？」

「え・・・っと、うん、それは分かってるんだけど・・・」

「怖いのは分かる・・・なんてことは言わない。私は人見知りってわけじゃないし、気持ち十全に分かるなんて口が裂けてもいない。でも、頑張って直そうとしない限り何時までもそのままなんだよ？」

「そ、そうだね。」

「じゃあ頑張ろうよ。皆良い人達だからきつと助けてくれるし、ひかりの力になれると思うな。きつと今が良い機会。やるべき時だと思ふ。」

「・・・えつと・・・その・・・」
「ね？」

「あ、うん、じゃあちよつとだけ・・・お邪魔してもいい？」
「もちろん。」

こうして響の出席が決まったのである。
帰り道。

「・・・憂鬱だ。」

『押し切られちゃったねえ。結局。』

「・・・ああ。」

『真摯に相手を思いやる相手に弱いね、響は。』

「・・・ああ。」

『・・・大変だね。』

「・・・笑えるのを堪えてるんだろ・・・分かってる。その震えた声で話しかけるのをやめろ。打ち殺すよ？」

『あれえ？そんなことを言ってもいいのかな？』

「あ？」

『厨房を強化しちゃうぞお。ようやく先が見えてきたところなのに、ここで強化しちゃうとあと一年はあれと顔を突き合せないといけなくなっちゃうよ？』

「すいませんでした。だからそれだけは勘弁してください。」

『よろしい。』

泣く泣く謝る。

「なあ・・・ほんとどうしよう。
バレルと思うんだ。意外と。」

『どうして？』

「なのは・・・と俺が呼ぶのは馴れ馴れしすぎるか。高町さんは被

害者だ。おそらく他の人間よりも俺の顔を強く覚えてる・・・と思う。」

『まあ確かにね。』

「誤魔化せるか結構な不安がある。いつそのこと風邪とか急用で休むのはどうだろうか？」

『あそこまで言ったのに？状況からして嘘だとばれるんじゃないかな。下手したらお見舞いなんてこともあるかも。』

「さ、さすがにそこまでは・・・」

『彼女達はやたらとお人よしだしねえ。ありえないと断じるのは難しいんじゃない？もしくはすずちゃんがお見舞いに行くねって話になってそこから皆で行く！なんて流れにもなるかも。』

「・・・そうなると文母さんを目撃されるな。」

『ばれるでしょうね。』

学校に親が呼ばれた時に、すずかやアリサが見てないとも言いきれない。

『いつそのこと女ってことにして女装したら？』

『まずばれないと思うよ？』

「・・・それはちよつと遠慮したいな。そもそもばれるだろう。」

『大丈夫じゃない？』

ほら、響って綺麗系のイケメンだし、女に見えなくも無いよ？多分。

『

「仮に女装したとしてもいきなり女装して行ったらなんじゃそら！？って話になるだろうが。」

『女の子でしただってことにしたら？』

「これ以上嘘で塗り固めたらまた何かややこしい状況になりそうだから遠慮しておく。」

『んもうつ！あれもいや！これもいやじゃ話が進まないでしょつ！』

「・・・もつとまともな案をくれ。」

『ばれたらばれたでいいんじゃないの？その時はその時だよ。』

「・・・。」

『それにこのまま嘘を付いてたところでいつかどこかでバレるのは明白。』

それともずーっと嘘をついたまま友人関係を育もって言うの？』

「うぐっ・・・それを言われると・・・」

『ばれた時はばれた時に考えれば良いよっ！』

さあいこうっ！！』

「・・・面白がつてるでしょ？」

『今更なにを。』

「・・・俺、アイシテルのこと嫌い。」

『安心して。私も響の事、好きという訳じゃないから。』

「・・・そうか。」

なんか傷ついた響である。

結局『我に妙案ありっ！』というアイシテルに任せて考えることを放棄した響であった。

泣いて逃げた

「・・・憂鬱だ。」

響はというと憂鬱真っ盛りである。

なんせ今回はお茶会！

そう、きやつらが来るお茶会なのである。

下手なバイトの面接や会社の企業説明会なんてものよりも緊張するであろうイベント。

すっぱかせたらと何度思ったことが。

「本当に大丈夫なんだろうな？」

『大丈夫、大丈夫。私にまかせなさい！！』

「アンタだから不安なんだが・・・」

えっへんと胸を張るアイシテル。

胸は無いんだけど。

実に不安だ。

「ばれたらホント頼むよ。」

『だから分かってるってば。まったく女々しいな。』

ほうっておけ。

そんな感じのことを言いたそうに顔を顰める響だった。

どうやら俺が一番乗りのようで月村さんと2人きりでお茶を飲む。
うむ。平和だ。

平和すぎてつい猫なで声で月村家のぬこをナデナデするのも仕方がない。

なぜなら平和だからだ。

平和ゆえに腑抜けたのであって、曰ころはこんなバカな真似はしない。

それがこの俺。相馬 ひびー ひかりである。

近くには月村さん付きのメイドとか言うファリンさんとやらが一緒になって話をしているのだが、従者がそんなことでいいのだろうか？

さらに言えば、どうやらドジッ娘に分類されるようで、ここに来て早々服を汚され、脱がされ、入らされ（風呂に）、着させされた。都合よく男物の服があるわけもなく。

なぜか月村さんのパジャマを着ているというこの状況。

結局女装することになってしまった。

いや、女装というほどでもないか。

パジャマなのでスカートというわけでもなく、デフォルメされたネコがプリントされているだけのもの。

外見年齢も相まって女装している感はない。

知らなければ女の子に見えるのは確かだが、子供の時は男の子も女の子も大して変わらないし、女物の服を子供に着せる親はちらほらいる。今の姿はその程度である。

何が言いたいかというと、別に女装じゃないんだからねっ！と言っておきたいのだ。

自分のパジャマを見られることになって少し恥ずかしかっていた月村さんが可愛かったとは言って置く。

ちなみにもう1人のメイド長のノエルさんとやは至って普通のメイドさんだった。

きつとフアリンさんは月村さんのお友達として――の意味合いが強いに違いない。

でなければ常識的に考えて、召使の類が主のお客と席を並べてお茶を飲むなんてこと許されるはずがないからだ。

そして尋ねたい。

なぜにこんなにもネコが多いのかと。

まあ撫でてる分にはなんら問題はないのだが、如何せん、ぬこが可愛すぎてノックダウンされそうだ。

ネコの多い理由でも考えて気を紛らわせないことでもしないかぎり、俺はきつと鼻血を出して気絶するだろう。
なんてことはなく。

普通に気になった。

「それはね、保健所のとか・・・野良猫なんかを引き取ってるうちに・・・」

これまた恥ずかしそうにそうの給う月村さん。

本当にエエ子や。

もちろんであるがこうした人は少なからず居る。

偽善と呼ぶ人もいるだろうが今回のコレは偽善ではなく完全な善と言ってもいいんじゃないだろうか？

見れば分かることであるが、この家のネコはある種、異状だ。
本来、ネコは群れる事を嫌う。

漫画やアニメなどで集会のように集まるシーンはあっても現実には滅多に無い。

犬のように仲良く一つの餌皿で餌を食べるなんて行為もしないのだ。

本を読んで学んだ知識なんだが、この家のネコは非常に珍しい。

よっぽどしつけが良いのか、はたまたそうした協調性を持つてでもここにいたいと思わせるのか。

次に注目すべきは毛並みや健康状態である。

もちろん世の中には野良犬、野良猫や保健所で殺処分される捨てられた犬猫を保護し育てる保護団体や個人の人々がいるが。

保護団体はともかく個人の場合は独りよがりな善意であることが多い。

単純な話。

資金が無いのだ。

一般家庭の人がネコや犬を複数飼うとなるとその餌代や予防注射代（国で義務とされてる狂犬病など。酷い場合予防注射が一切されず、人間に危険が発生する）だけでも、かなり高額の世話代がかかる。糞尿の処理だってかなりの手間暇がかかるはずだ。

時には群れに馴染めなかった個体が虐めで酷い怪我を負うこともあるし、糞を処理しきれずに病気となり死んでしまう場合もある。

そういった人の多くは善意だけ押し付けて、結果的に苦しい生活を近隣住民や救うべき犬猫に強いることとなるわけで。

いわばありがた迷惑だ。

口先だけでるくに救えてない、満足に救えてないという状況になる。悪いというわけでもないが誉められた行動でもない。

って、俺みたいなやつが何を偉そうに言ってるんだろうね。

とにかく、ここのネコにはきっちりと管理が行き届いていることが分かるのだ。

糞も見た限りでは見当たらない。

糞はそのままでは肥料とはならず、有毒なアンモニアが発生し、それが草を枯らす。

土中の自浄作用以下の量ならばともかくこれだけいれば確実に分解されない糞が出てくるはず。

しかし、枯れた草が見られないことから目に当たる場所だけ掃除しているということもなさそう。

おそらく専門の世話係を雇いつつも、屋敷に住む人間が一丸となつて世話をしているに違いない。

金持ちだからだろ！と言うヤツもいるだろうが、逆を言えば金持ちでもない限り下手な救いは中途半端になるだけでやめるべきということ。

そんな惨状を招くくらいなら政治家を目指して、犬猫の投棄を厳しく取り締まる法律を作るべく動いた方がよほど建設的で効率的だろう。

全部本の知識の受け売りだが、本当に彼女はネコを好きなようだ。ただ可愛いだけと侮ることなく、世話に関する手間暇苦労も含めて猫を愛す。

可愛い部分だけを見て、軽い気持ちで飼ってしまつと飼育者にとつても飼われる側にとつても非常に不幸なことになる。

時には保健所に預ける際、「家のネコだけはちゃんと飼い主を見つけてあげてよね！」などという身勝手なことを言つて捨てていく人間もいるらしい。

そんな人間が居る中で、彼女は本当のぬこリストと言つていいだろう。

「ど、どうかした？」

「うつん、なんでもないよ。月村さんは本当に偉いなって。」
「えっと・・・そんなことないよ?」

本当にー自分の黒歴史が惨めに思えてきます。
どうしてあんなバカだったんだろうね。
泣けてくらあ。

泣きそうになりながらも、にゃんこを撫で回しているとピンポーン
とインターホンの音が鳴り響いた。
いよいよ来たか。

ここまで来たら覚悟を決めよう。

「こんにちはー。」

「こんにちは。」

まずは高町さんとーなんだこのイケメン。イケメンか? うん、
イケメンだ。あえてもう一度言おう。なんだこのイケメン?
イケメンかつ声までイケメン。もといイケメンボイスなんだが。
イケメンすぎるだろう。

「こんにちは、すずか、来たわよー。」

次にアリサ・バニングス。

高町さんの一件でぶん殴られて以来、とっさに逃げたくなった。
まてまて、大丈夫ばれないばれない。
ばれないばれない。

高町さんがこちらを見てくる。

そら、見覚えの無い人間がいたら気になるよね。

「こんにちは、皆。」

・・・ほら。ひかり。言っただしょ。」

「・・・あ、うん。」

「人見知りを直すためにも自分で自己紹介して。」

「わかってるよ、月村さん。」

何度も重ねて言うけど、別に人見知りじゃないんだけどね。君たち以外の人間ならば。

立ち上がって、口を開ける。

「わ、私は相馬 ひかりっていいます。よろしくおねがいします。」

無駄にかしこまって一人称まで変わってしまった。

月村さんは少し噴出していた。

行儀悪いよ？

「そうま・・・？」

高町さんがなにやら少し嫌そうな顔をした。
ばれたかっ！？

「・・・アンタにお兄さんとかいる？」

何か言いたそうにした高町さんよりもバニングスさんがこちらに問いかけてきた。

まあ聞かれますよね。

名字同じなもの。

小さい声だけど、「・・・似てるわね。ていうか・・・瓜二つ・・・

双子かしら？」とか言っている。
もちろんのこと。

「いませんよ？」

満面の笑みで応えてやったぜ！

ちなみに高町さんのお兄さんがこちらをじっと見ている。

その視線はどこか厳しい。

おい、9歳児に向ける眼光じゃねえだろ。

普通の9歳児だったらこの時点で泣いてるわ。

というか、まさか気づいてる？なんてことは・・・いや、まてまて
大丈夫大丈夫。

まだ疑ってる段階だろう。多分。

背筋が脂汗でびっちよりになってきたくらいの沈黙が終わったあと。

「そうよね・・・あれみたいなバカがこんな素直なわけないし。」

「・・・そうみたい。よかった。」

バニングスさんと高町さんがほっと一息つく。

そこまで警戒されるほどだったんですね。

俺、泣きそう。だって男の子だもん！

「・・・身振り手振りからすると・・・いや、だが・・・雰囲気
あまりにも・・・うつむ・・・しかし重心の置き方といい・・・」

お兄さんはまだ疑っているようである。

ていうか、身振り手振りってなんじゃそれ？

え、この人ただけ？

この人と面と向かい合ったのは一度のみ。高町さんの家に謝りに行

く時だけ・・・だったはず。

ていうか重心の位置とか見て取れるんですね。

何、この人。怖い。格闘技とかやってるんですか？

いや、それ以前に格闘技やってても重心の位置で人の判別を取ろうとする変態はいないと思います。

ていうか、こいつは俺とはまた別のベクトルで変態では？と思え始めてきた。

ちよつとした振る舞いでバレかねん雰囲気がある。

只者じゃないっ！と思ったね、ほかあ。

さらに問題が積み重なった。

「あ、いらつしやい。ちー君。」

ちー君とか親しげに相性で呼ばれた男はいつぞやの山田君（仮称）。

美少女に相性で呼ばれるとは羨ましい。

というか下手したら既にフラグを作っているのではないだろうか？

妬ましい。死ねばいいのに。

というか殺してしまおうか？

「・・・どう思う、アイシテル？」

『バカ言っでないで、気をつけないとー！ーほら、彼は転生者だから・・・』

「・・・原作にいない・・・その顔・・・おまえっ！？
性懲りも無くまた来たのかっ！？」

や、やべっ！？

これは非常にまずいっ！！

「えっと・・・なんのことだか？」

「ああっ!？」

馬鹿やるうつ!!--てめえは居ないはずの人間だろうがっ!!--なんでここにいるっ!!--

またなのはにセクハラする気かよっ!?!この厨二野郎がっ!!--変装までしやがって・・・俺は騙されねーからなっ!!--

「ち、ちが・・・」

やばばばばばっ!!--

やばす!!

これは不味いつ!!--

正義感溢れる山田君にしては端から敵対心MAXモードであるが、それが正しい。

あれだけ迷惑かけて彼の友達にセクハラしたのだから、むしろこれくらいが当然だろう。

何も聞かずに追い出されても文句は言えないくらいの酷いことだったわけなのだし。

お兄さんは山田君ほど敵対視しては居ないようだが(それはそうだが、飯にも子供なのだから)、いつでも高町さんの間に入れるようにさりげなく間に入っていた。

そのさりげなさがなぜか異様にぐさりと来ました。

周りの視線はまさかっ!?!って感じである。

月村さんに至ってはその顔に凄まじいまでのガツカリ感　といえは若干コメディ臭いが、10年来の恋人に突如「別れよう。実は俺・・・女だったんだ。」と言われた様な顔をしていた。

いや、そんな顔見たこと無いからこの例えが正しいのかは分からないが何はともあれ、こんな時こそ困った時のアイシテル頼み。

さあ、存分に思いつきりやつちゃって下さいよ!!

アイシテルの姉御っ!!

『合点承知っ！！』

そしてアイシテルがやったことと言えば。

「ハァーハアツハアツハアツ！！

そいつは俺の偽者だっ！！本物はこの俺！！

ビューティフルびびー」

「死ねえエエエエエえっ！！昔の俺はいらんわあっ！！」

いきなり月村家に突如出現した謎の厨房。

その正体は俺の昔のアレだった。

よって俺はつい反射的にぶん殴った。それこそ殺す勢いで。あらん限りの力をこめて。

「ごぶっ！？

・・・強くなっただじゃねえか・・・ひびき・・・ガク。」

そのままズンと倒れこむ厨房。

なぜこれを出すっ！？

多分、同じ人間が2人もいるはずもないということ考えたことだろうが。タイミングと出現場所が意味不明すぎた。

なぜ月村さんのスカートのからニユっと出てくる。

ほら、月村さんなんか倒れこんで・・・倒れこんで気絶して・・・ああ。

うん。これダメだ。

何より倒れ間際の厨房の言葉。

なぜ俺の名を言ってしまったのか。

『響も“昔の俺”とか言っちゃってるよ?』

そうだったな・・・終わった。

何もかも終わった。

が、どこかすがすがしいのはなぜだろう。

そう、きっとこれは。

友達を騙すことに引け目を感じていた良心の痛みが無くなったからだ。

それと同時に唯一の友達も無くなってしまったがな。

「・・・アイシテルのあほおおおおおおおおお
っ!!」

俺は泣きながら月村家を後にした。

アイシテルには頼らないことを決めた記念すべき日でもある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1936z/>

とあるチートを持って！

2011年12月16日19時02分発行